
VOLTIA

ヒルトゥス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V O L T I A

【Nコード】

N 8 5 4 2 U

【作者名】

ヒルトウス

【あらすじ】

ヴォルティアは、神々の国ガドウォルドで最強の戦士であった。今、他の種族や神々との、壮絶な戦いが始まる。これは作者オリジナルの神話で、実際にこのような神話が古くからあったわけではありません。

雷の戦士（前書き）

さあ新たな神話の始まりです。面白くないかもしれませんが、魂を込めて描きたいと思います。

それでは”VOLTTIA”、お楽しみください。

雷の戦士

彼はヴォルティア。

神々の王国ガドウオルドで最強の戦士だ。雷の神フアラライズの子であり、雷と勇気の神であつた。彼は一年に一度はどこかの国を制覇してガドウオルドに帰ってくる。

彼の力の源はなんなのか、それを科学の神サイアーンや計算の神アカントが調べようとしたが、わからなかった。それほどまでに強大な力を持っていたのだ。

サイアーンは、アルベルト・アインシュタインと血がつながっていた。だからアインシュタインは、あそこまで物理学に没頭し、ついに大きな発見までしたのだ。

アカントは、かの有名なブレーズ・パスカルと血がつながっていた。だからパスカルも、あんなふうに数学にハマったりしたのである。

その日、ヴォルティアは、神々のガドウオルドから離れ、星の住む国ストラウオルドへと飛んでいた。その雷の力は、小惑星をも木端微塵に碎くほど強力で、星々もヴォルティアの到着を今か今かと待っていた。

そしてヴォルティアがストラウオルドへと到着した。ストラウオルドの王、ガームonzはヴォルティアと固く握手をして、宮殿へと招き入れた。

『ヴォルティアの到着は、ストラウオルドの勝利を示している』

と、ガームonzは何度も言った。実はストラウオルドは、植物の国グリーンワールドと戦争をしていたのだ。神々や人間、怪物、動物にとつては、植物も星もなくてはならないし、植物も星が必要なのだが、星はストラウオルドにおける”庭園”と呼ばれる事件（スト

ラウオールドに植物が生えた事件」をグリーンワールドからの攻撃とみなし、戦いを始めたのである。

ヴォルティアは戦術に長けていながらも、ファラライズとは違って、すべては力で解決できるものではないと信じていた。神々の王、レジアスもそのような考えの持ち主であったからである。

よってファラライズ勢力とレジアス勢力はいがみ合ってばかりいた。

ガドワールドと怪物の国モンスワールドが戦争を始めようとしていたころ、レジアスは言った。

「モンスワールドの勢力がもしすぐにガドワールドを襲った場合は、戦だ。しかし、すぐに襲ってこなければ、話し合いで解決する道もあるということだ」

しかし、ファラライズは反論した。

「貴様は何もわかつちやいない！ もうこうなったら戦争だろうが！ 力に勝るものはない！」

ここでレジアスは制した。

「兄上、座ってくれ」

その言い方にムカツと来たのか、ファラライズは槍を出現させてレジアスに突きつけた。

「ケンカ売ってるのか？ 俺は売られたケンカは買うぞ」

レジアスはため息をついて、自身の武器を出現させた。大きな棍棒だ。

「狩猟と格闘の神レジアスに勝てると思っているのか？」

それを聞くなり、ファラライズは、

「ああ、勝てるさ。お前なんか吹っ飛ばしてやる」

ここでレジアス派とファラライズ派がケンカを始め、後にいがみ合うようになってしまったのである。

ともかくヴォルティアはレジアス派だった。ガーマンズに、まず話し合え、と助言をし、ヴォルティアはガドワールドへ帰った。

その後、ストラウオールドとグリーンオールドは話し合わずに戦い続けたが、最終的には、和解した。

雷の戦士（後書き）

面白かったですでしょうか。

これから始まる様々なエピソードも、今回は投げ出さずに取り組みたいと思っております。よろしくお願いいたします。

氷の雷神（前書き）

タイトルは意味不明ですが。

氷の雷神

あるところに、”氷の雷神”と呼ばれる神がいた。

雷の戦士であり、ファラライズやヴォルティアの家族だった。つまり、ヴォルティアの兄だった。

彼の名は、グロウシャス、といった。

彼は、体は熱い。なぜなら、雷の神だからだ。しかし、性格は冷たい。だから、”氷の雷神”と呼ばれるのだ。

彼は、ガドウォルドでも最強のランクに入っていた。

だからこそみんなに尊敬されていたが、めったに人前に姿を現さない。

冷静かつ俊敏で、天才的センスを持つヴォルティア、好戦的で喧嘩っ早く、恐ろしく攻撃的なファラライズとは対照的、冷静ではあるものの、そこまで俊敏というわけでもなく、喧嘩っ早くもなく、攻撃的でもない、単純に冷たいだけの神だった（印象は）。しかし、まったく動かずに、走ってくる敵を一掃するほどの実力者であった。だから彼は、ファラライズやヴォルティアとは仲は良くなかった。

グロウシャスは、ガドウォルドの路地を歩いていた。昼は煌びやかで、皆が騒ぐこの地でも、夜では誰も出歩かず、いるのは数人の神だけ。しかもその数人は、めったに顔を現さないようなやつだけ。グロウシャスは、神々のエネルギー源である”樹”へと向かった。彼はそこで、神の誓いの言葉を述べた。

「世界が暗闇に包まれようと、世界が炎に包まれようと、いかなる悪をも見逃しません。我々は、いつでも正義とともにあります」すると彼がケンカで負った傷が、みるみる内に治っていった。

ある日、レジアスとファラライズがケンカをし始めた。

「大体、お前はいつもそうなのだ！ 好戦的で喧嘩っ早い。それに

酒好き女好き！ この変態雷神めが！」

レジアスは叫んだ。ファラライズは言い返す。

「そういうお前は何にも興味を持たない！ 面白くないやつだ！」
レジアスは怒っていた。大広間の空気が張りつめている。レジアスのせいで、暖炉の火がライオン、どっかの怪物など、いろいろな形に変わった。シャンデリアが割れた。悲鳴が上がった。

「レジアス、怒ってんのか？ ならやめてもらおう。俺も無駄なことにエネルギーは使いたくない」

「ファラライズ、戦うんだ。俺は怒っている。俺を止めるんだ」

「嫌だね、面倒だ。大体、息子二人に実力を抜かされたこの老いぼれの私めが、格闘、狩猟という、過激なスポーツの神に好戦的と言われる意味も分からないからな」

「ファラライズ、なら私が一方的にやろう」

レジアスが振り向いた。エネルギー波が、広間を襲う。テーブルの食べ物、ぐちゃぐちゃにひっくり返った。

「レジアス、もう我慢ならんよ。クソ野郎が！」

ファラライズの指から、多分一発で2000世帯の家が10年は賄えるほどの電力を持った雷が飛び出す。

レジアスは、それを食らって数メートル吹き飛んだ。

「ファラライズ……、それで……いい……」

ファラライズは、にやりと笑う。

と、そこにヴォルティアが帰ってきた。また、偶然本を読みながら屋敷を歩き回っていたグロウシヤスがやってきた。

ヴォルティアは叫ぶ。なんと、父親の指から煙が立ち上り、自分の尊敬する神が一人、壁に突っ込んでいたからだ。

「父上！ 主神たるレジアス様に何を！」

ヴォルティアは、怒ってファラライズの雷の数倍は強いものを撃った。それはファラライズに直撃したが、ファラライズには全く効いていない。

そこで、冷たい空気が全員の首を冷やした。

グロウシヤスが、口を開いたのである。

「ヴォルティア、やめろ……。父上は、やはりおじとケンカしたいのだ」

「しかし、兄上……」

「くどいぞ。黙れ」

フアラライズが、叫ぶ。

「グロウシヤス、その態度はなんだ！ 仮にも相手は神だ！」

「私も神だぞ。忘れたのか？」

「親であり主神の兄弟である私に、なんという口のきき方をするのだ！」

「黙れ。俺にすら勝てないくせに」

「なにをオ？」

フアラライズは、雷を撃った。グロウシヤスはそんなものは受け流し、まったく動かずにフアラライズを屋敷から外へ出した（つまり、ぶっ飛ばした）。

彼は、にやりと笑った。

彼の背後では、ヴォルティアが怒りの形相で立っている。

そしてグロウシヤスは、雷の大轟音と、閃光に紛れて消えた。

グロウシヤスは、その後消息を絶った。

彼は、噂によれば、ストラウオールドで敗北したとのこと。

そして彼の墓が、ストラウオールドにひっそり立っているらしい。

しかし、新しい情報によれば（さっきのも信頼性はない）、ガドウォールドの屋敷のそばで民間神が目撃したらしい。

少なくとも彼は、王室からは消えた。

氷の雷神（後書き）

ものすごく曖昧な終わり方です。

火炎と雷（前書き）

登場神が一人増えます。

火炎と雷

ある日のこと。

いつもと同じように、ヴォルティアは、ガドウォルドの路地を歩いていた。

あちこちに酒瓶が転がっている。

ヴォルティアは今日、とある神に会うことになっている。名をイグニセイアと言った。

イグニセイアは、ガドウォルド有数の金持ちで、炎と金の神であった。

イグニセイアは、強かったが、一度も戦争に参加したことがなかった。

ヴォルティアは、イグニセイアを、ガドウォルド軍の戦力とするために、イグニセイアの居へと向かっているのだ。

ヴォルティアは、歩きながら、別なことを考え始めた。

実は今彼は、親と（いつも以上に）仲が悪い。

ファラライズはうざい奴だなーとか、そういったことを考えていた。

ヴォルティアのほうが明らかに強かった。それはファラライズも認めていた。でも、ファラライズのほうが、権力はずっと上だから、ヴォルティアのほうが総合的には、弱かった。

ついにイグニセイアの家に着いた。

イグニセイアの居は、”炎の都”と呼ばれる都市にある。

そこは、夜でも松明やろうそくがあり、たき火をする人がいる。いつでも明るく熱い街、ということである。

イグニセイアの家は、大したものではない。

ガドウォルド有数の金持ちでありながら、決して飾ってはいない。ヴォルティアがノックしたら出てきたが、別に荘厳な衣装をまとっているわけではなかった。

しかし、性格はどうかというと、高慢で、自意識過剰であった。

イグニセイアは、昔、フメンウォルド（＝地球）における、”太平洋戦争”という戦争で、アメリカとかいう国の軍に交ざったことがある。

それがばれて、レジアスに追放されてしまったのだ。

しかし、最近、あらゆる次元との戦いが迫っている。

前、ストラウォルドとグリーンウォルドが戦争した。

ならいずれば、ガドウォルドも、どこかと戦争することになる。だからこそ、レジアスはイグニセイアを引き戻したいのだ。

イグニセイアは、ヴォルティアに、武勇伝を延々と聞かせた。

ヴォルティアとしては、早く本題に入りたかったし、しかも出された酒や茶がまずいので、早く帰りたいかった。

しかし、図らずもイグニセイアはヴォルティアよりも権力があつた。

ヴォルティアは、目上の神に向かって、「早く本題に入らせろ」

とか、「帰りたい」というほど、愚かではない。

イグニセイアの家は、見たことがないものでいっぱいだった。

多分、フメンウォルドのものだろう。イグニセイアは、フメンウォルドが好きだったはずだ。

読者にはわかるはずだが（ヴォルティアにはわからない）、テレビ、ラジオ、パソコン、車、自転車、バイクなどが置いてある。

ヴォルティアは気になってしょうがないので、一通り話してから、謎の機械で黒い液体（＝コーヒー）を作っているイグニセイアに訊いた。

「イグニセイア様、こちらにある不可思議なものはなんでしょう？」

イグニセイアは答える。

「ああ、それか？　まずそれはテレビ。いろいろな映像を映せるものだ。もちろんここでは映らんが。あれは、なんか電波とかいうものを飛ばしてるから、別次元には飛ばないんだ。で、それがラジオ……」

と、3分ほどしゃべったが、ヴォルティアは、実に熱心に聞いていた。

「……で、ほかにもいろいろ。フメンワールドは面白い。ここよりはるかに発達している。もちろん、ここにいるものより力は劣るが。でも我々より頭脳は素晴らしい。何かを楽しもうとする心意気もな。ついでに、マシンガンとかもあった。いちいち魔法を放つのではなく、もともと”弾”という固形のものがあって、それを連続で撃つんだ。あれはすごかったよ」

ヴォルティアは、やっと話が終わると、椅子の背もたれにもたれた。

そして、また訊いた。

「イグニセイア様、先ほどの機械と、黒い液体はなんでしょう？」

イグニセイアは答える。

「液体はコーヒーと呼ばれる飲み物だ。機械は、コーヒーを入れるものだよ」

ヴォルティアは感心した。

「で、何の用なんだ？」

イグニセイアが訊く。やっと本題に入れると、ヴォルティアはまくしたてた。

「いや、イグニセイア様、現在、あらゆる次元で戦争が起こっております。フメンワールドの者が発見した神々は、もう戦争していませんが、我々もいつか戦争を始めることになる。そこで、レジアス王はあなたを追放なさいましたが、もう一度戦力として呼び戻したいということです」

イグニセイアは笑って、

「冗談だろ？」

と訊いた。

「俺はガドウォールドのために戦ったりしない。俺は、フメンウォールドも好きだし、ガドウォールドも他の次元も好きだ。だから、あくまで傍観者でいたいんだ」

ヴォルティアは説得する。

「いや、あなたは素晴らしい戦力です。現在、グロウシヤスが失踪しました（この時、イグニセイアは「ウソだろ？」とつぶやいた）し、戦力不足です。あなたの力が必要なのです」

イグニセイアは、

「だから嫌だ。俺は傍観者でいたい。この手で、自分の愛するものを滅ぼすなんて俺にはできない」

ヴォルティアはがんばっている。

「ですが、故郷であるこのガドウォールドが滅んでもよいのですか！」

イグニセイアは怒った。

「だから何度言ったらわかる！ 俺は傍観者でいたい！ 確かに自分の愛するものが滅ぶのは辛いけど、どうせそうなるなら、自分の手で滅ぼそうなどとは思わない！ 始まりから終わりを見ていたいのだ！ いいか、レジアスに伝えておけ、俺は決してお前らの味方になろうなどとは思わない。俺は誰の味方でもない。単純な傍観者だ！ 帰ってくれ！」

ヴォルティアは、炎に巻き上げられて、開いた窓から飛び出した。

「二度と来ないでくれ！」

イグニセイアはそう叫び、窓を閉めた。

ヴォルティアは、仕方なく立ち上がり、歩き始めた。

そして、数メートル歩いたのち、彼は、空高く飛び上がり、宮殿のほうへ飛んで行った。

火炎と雷（後書き）

登場しましたが、大した神ではないです。
今度イグニセイアがどうなるか、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8542u/>

VOLTIA

2011年10月12日21時56分発行